慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	見世物興行の戦後と現状 : 興行師の動向を中心として
Sub Title	Spectacle tent group after the World War II in Japan : a special reference to professional promoters
Author	門傳, 仁志(Monden, Hitoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.107 (2002. 1) ,p.277- 292
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集文化人類学の現代的課題 研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0280

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

見世物興行の戦後と現状

—興行師の動向を中心として—

門　傳　仁　志*

Spectacle Tent Group after the World War II in Japan:

A Special Reference to Professional Promoters

MONDEN Hitoshi

1. はじめに

現在まで仮設興行の社会[1]について，フィールド調査を元にしたモノグラフ的研究と言うものはほとんどなされていない（鵜飼他 1999）.

こうした問題について関心を寄せるべきはずの芸能史，あるいは民俗芸能研究においてさえ，状況は同様であり，結果的にこうした不備は，この社会を担い手として展開してきたサーカス，見世物小屋をはじめとする仮設興行文化をめぐる各種の記述のあいだに，相互の情報伝達上の参照点を見出すのが，ほぼ完全にといって良いほど不可能といえる状況を生んでいる.

たしかに，1970年代にサーカスについての研究が盛んであったことは記憶に新しく（阿久根 1977，尾崎 1958），この時期行われた記述のなかには，当該社会の情報をもたらすものもある[2]. だが，いずれも沿革や社会関係に関して体系的に捉えようとする姿勢は希薄であり，上記の不備は観察者の思い入れなどの恣意によって増幅されるばかりである.

端的に言って，これまでの研究に見られる不備は，仮設興行文化[3]の担

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

い手である，当事者の社会的現実に関する洞察が，これらの研究のなかでは不足していることに由来するものであろう．だが，彼ら当該文化の担い手にとっての，生業を実践する際のよりどころとなっている，当事者間で長年維持されてきた，社会生活にこそ，当事者にとってのリアリティがあり，また，これまで単に大衆芸能として語られてきた各種の見世物文化についても，こうした社会生活とともに，包括的に理解する必要がある．

ここでは，これまで仮設興行の文化に関してなされてきた研究に対して，担い手の視点から問題提起を行うことを目的としている．具体的には，当事者の社会について，これまで知ることとなった，当該社会の成立過程を述べる．そのあと，該社会における主要な関心事を，興行地をめぐる動向に求める．こうした作業のあと，見世物小屋をはじめとする仮設興行を，社会とともに理解するための視座を探ることとしたい(4)．

2. 沿　　革

(1) 昭和20年代から現在まで

世相全体が高度成長に向かって上昇の兆しをみせはじめた昭和30年代，仮設興行をふくめた露店業界(5)は，戦前の家名が乱立する状況から一転し，再組織化の動きを見せはじめていた．以下．その概観を，全日本仮設興行協同組合の動向によりつつ記述する．

第二次世界大戦の影響は，露店業界の社会にとっても無縁ではなかった．一家の若い衆として戦前からつとめていた者たちは徴兵されたり，戦地で命を落とすことになり，安定した生活などは到底望むことは出来なかった．

このように混乱した状況はまたべつの要因によって拍車がかけられる．たとえば当時の東京都内の露店業界について見た場合，各地に設けられた闇市では食い詰めた引き揚げ軍人や，在日朝鮮人を中心に組織された露店が横行し，古くからの露天商の生業の場であったはずの場がこうした新興

の露天商たちによってまさに「荒らされていた」(猪野 2000).

このような混乱は，有名な「新橋事件」をはじめとするような，露天商たちの対立・抗争を招くこともしばしばであり，不幸な者は命を落とすというような弱肉強食の時期であったという（猪野 2000).

タカマチ[6]を生業の場とし，タカモノと呼ばれる仮設興行に従事する者たちの社会にも，混乱は同様に訪れることとなっていた．というのも，彼らの生業の場もまた，寺社の祭礼や縁日，それから様々な歓楽地であることにはかわりはない．また，興行地（ニワバ）の所持者についても，それは我々が想像する以上に入れ替わりが激しく，露店業界内において，既存のあるいは新興の他露店業種との拮抗は避けられなかったのである．

ところで，タカマチを生業の場とするもののあいだでは，業種上の区分がなされているが，仮設興行は，こうした業種の一つとして考えられるものである．仮設興行は，他の露店業種にくらべて小屋掛けから芸人の育成などのように手間が掛かることから，一段と高い格付けをなされ，明示的ではないもののゆるやかな連合組織をもっていたという．また仮設興行の社会は，「荷主」つまり興行物を持って巡業するものと，「歩方」と呼ばれる勧進元に分かれる．たとえば，一大興行地であった浅草ひょうたん池には，戦前より数十本を数えるサーカスや見世物をはじめとする興行物がまさに軒を連ねていた．おそらく莫大な利益を生んだこうした興行地では，親分たちのなかでも，地元に根付いてこの社会で強い権力を持ったものでなければ「歩方」を努めることが出来なかった．

ところで高町を商いの場とするものたちの社会全体の混迷により，上記した緩やかな連合体は明確な規約と組織性を備えた組合として再編されることとなり，その結果，昭和31年，社団法人全日本仮設興行協同組合が設立された．設立理由は主に，該社会における，利権や権力関係を明確にすることにあった．全国各地に点在する興行師の動向は，平時でさえも把握困難なほど複雑な様相を呈していたのである．

だが，組合設立の理由は，その他にもある．たとえば組合設立者の一人であり，有名なシバタサーカスの支配人を務めていた室川与一氏は，彼は仮設興行につきまとう従来の暗いイメージについて次のように述べている．「切符を売るのをサーカス側がひきうければ，切符の改札は土地のものがやるが，多くの場合にこの土地の者がグレン隊だったりするので”サーカスとやくざ”という観念を植えつけてしまう．これは早急に解決しなければならない大問題で……」(南他編 1981)．こうした発言には，戦後の民主化のなかでこの社会にしばしば付されることのたしかにあるくらいイメージと，しかしそこをなお生業の場とし続けなければならないというジレンマが表れているように見え，いずれにしても中々言いにくい状況が反映しているのであろう．

(2) 「興行文化」の隆盛

設立から今日までを概観した場合，見世物小屋はどの位の本数を数えたのだろう．昭和 22 年生れのある興行師は，組合設立にかかわった世代から数えて，自らを 2〜3 世代目にあたると述べたあと，仮設興行の文化の隆盛期を次のように振りかえって次のように語る．

彼女が父の代を継いだ昭和 43 年 (1968) ごろ，見世物小屋の荷主の数は最も多かったのではないか．当時組合には，見世物小屋だけでも 30 本以上もあり，荷主間ではまさにシノギをけずる状況だったのである．続けて彼女は言う．興行師は，巡業日程を組むさい，当然売上の多い場所を狙うのだが，男性中心の世界でもあるこの社会で，女の興行師が生きていくまで，随分とつらい思いをしたことがあった．巡業するために，興行師たちは組合員の「新年会」のように興行師たちが一同に会する機会を狙い，興行地を持つ歩方を相手に「ヨヤク」を交わす．こうした契約は，それまでの実績や信用あるいは当該社会特有の「縁」などのような要素に左右されることが多く，競合する興行師たちの間でもさまざまなかけひきが日常

的に行われていた．自然，彼女のような新規参入者に注がれる周囲の視線は，温かいものではなく，それまで「良い顔」をしていた仲間の中には，「巡業地を得る便宜を肩代わりする代わりに謝礼を求める者がいた」り，また24歳という若い自分にとってより辛らつだったことは，ヨヤクの際に「色目を使った」などと言うものがあったほどだという．

このころの仮設興行文化の隆盛には，たしかに目覚しいものがあった．高度経済成長という時代背景を得て，映画をはじめとする，各種娯楽産業全体が上昇期にあったこの時期，この成長の一端を担いながらも，微妙な独自性を備えながら，仮設興行の文化は，独特の展開を見せてきたのだと言えるのだろう．たとえば，この時期の仮設興行文化の隆盛を物語る事例として，あるサーカスが，仮設興行経営から次第に映画館経営にまで拡大した，という事実が指摘されることがあるが，このような指摘は，映画に限らず，プロレスやボクシングなど，日本で独自の発展を遂げた各種娯楽産業全体の成長とともに，仮設興行の文化を見て行く必要を我々に気付かせるものである．

ところで，人々は恒常的に高い興行収益をあげることができる高町として，観桜の時期の青森県弘前城址公園，それから夏祭りの時期の福岡県博多市，「博多天神祭り」をあげるが，この時代の特徴としては，戦後から昭和45年(1970)までのあいだに，仮設興行が，伝統的な高町の場である社寺の祭礼を離れ，別種の興行プロモーターの手によって開催されたことを挙げることができるだろう．

たとえば複数の意見として，昭和55年(1980)に，東京都，明治神宮で開催された「日本のまつり」と題されたイベントが，規模的にも比較的大きかったことを挙げることができる．ここでは見世物だけではなく，ほかにも大道芸などもふくめたパフォーマンスもよばれており，興行収益についてみても相当なものだった．因みにここでは民間のテレビ局がプロモーターとなっていたが，仮設興行社会が徐々にその閉鎖性を打ち破りつ

つあったことを読み取ることができよう.

さて，以上のような，興行地が新しく生じる場面には，現在でも時折目にする．たとえば，埼玉県朝霞市は，平成12年(2000)8月の「朝霞市民まつり」において，お化け屋敷を新たに出店した．その背景として人々は，ここ数年，祭りの際に，テキヤは，地元住民によって徐々に排除される傾向にあるという事情をまず挙げる．彼らの代わり，祭りの演出を担う露店は，地元商店街が担うようになってきている．だが，彼らは今一つ祭りの演出としての力が足りない．こうした不満が祭りを訪れる人出として現れるようになったのではないか．おそらくこうした現状を省みた主催者である同市の観光担当者が彼ら（お化け屋敷）を呼んだのではないか，と述べる.

ちなみにこの時のお化け屋敷興行は，祭り主催者の一人である地元有力者と同地の興行権を持つ人物との交渉を経て開催された．このように，各種のエージェントを通じた，新らしく興された興行場所をめぐる動向は，戦後の仮設興行の文化の消長を読む際の鍵となるものであろう.

(3) 現在の動向

仮設興行は，その組織的充実についても興行収益についても昭和40年代半ばから50年代をピークとして，現在にいたるまで徐々に下降しているというのが大方の見方である．こうした動きの要因として，当事者たちは景気そのものの落ち込みと，テレビをはじめとする娯楽の充実などをあげるが，そのほか頻繁に耳にするのはひろく人権思想の普及といいうるような諸々の制度的充実がある．こうした中にはたとえば芸を演じる若い衆の生活条件を告発するものがある[7]．だが，ここで筆者が強調したいのは，「一家」や「社」として名乗るような仮設興行の母体そのものに従事する者がもはやいないという点である．平成13年(2001)現在ほとんどの興行社の場合において，分家なり独立によって一本立ちをしているのは

昭和30年代に集中しており，その後はわずかな例外を除いて見られないようである．事実，取材をはじめた平成10年(1997)において中心となっていたのは70歳代の世代が目立っていた．この年代の正確さはとりあえず保証しかねるが[8]，たとえばタカマチの場でほかの露店業者たちのなかに10代から20歳代と思われる若者が目立つことを考えるとたしかに疑問を覚える．その要因として考えることのできることとしてこれまで分かったことを一つだけあげると，「親の家業を継ぐのがあたりまえだった時代」（70代後半男性）と異なり，現在の興行師たちは子供たちの教育環境や就職などの事情を考え，タビすることを自分一代限りと考えている（80代後半男性）というのが多いようである．また他の露店業種の内容に比べて，仮設興行は手間が掛かることもその一因となっているようだ．

だが平成13年(2001)11月現在，新しく見世物小屋の興行を志す若者があらわれた．Aはこれまで都内のある劇団に所属しており，現在20歳代である．彼は今後，興行社から独立することに形式上なっており，通常この場合には「のれん代」を売上から納めることになる．しかし彼の親方筋にあたる40代後半の親方は，現在面倒を見るために彼の興行社の若衆にすることになっているが，タビを無事打てるようになればのれん代は必要なくすぐに独立してもらうことになるだろうと述べる．Aは見世物をはじめようとした理由として，「とにかくやりたかった．人生すべて賭けてもいいと思っている」と筆者に話す．

3. 興行社会

仮設興行社会の動向を，全日本仮設興行協同組合の設立に一つの契機をもとめたうえで，その沿革を概観してきた．こうした作業からはまず，当該社会の展開は，決して線的に理解し得る，単純なものではないことが伺える．ここでは，今日にいたるまでの沿革を読み取るための一つの視点として，興行地をめぐる，組合加盟の興行社の動向を取り上げることにしたい．

仮設興行に従事する興行社の連合組織である「組合」には，興行時，タカマチが開催される地元において興行地（ニワバ）を預かるものと，興行物（ニモツ）をもって巡業をするものというように，大別することができる．それぞれ歩方，荷主とよばれるが，両者の関係は次のようになっている．まず歩方は，興行地を預かるものである．歩方は，荷主たちが無事興行を行えるように，小屋がけの丸太の搬入や小屋掛け人夫の提供，より重要なのは興行地の割り振り，また社寺との交渉や揉め事の仲裁など，多岐にわたる仕事を請け負う．一方，荷主側からは，その見返りとして，売上全体から3割から4割を払うこととなっている．

ところで，ニモツという語には，この社会において両者がどのような関係にあるかを反映するような，ある含みが込められている（青江 1958）．そこには，見世物やお化け屋敷などの舞台装置をはじめとするモノだけではなく，芸を行う人々（太夫）たちをも同時に含まれるのである．このようにニモツという語に含まれる，特殊な意味を理解することは，すくなくとも興行の現場においては，この社会が，興行地を預かる者としての歩方を中心に組み立てられていることを予想させるものであり，このような見方に基づくならば，仮設興行の社会の動向を読む際には，歩方にこのような立場を保証するものとなる，興行地の由来に留意する必要があると言える．

ところで，ある興行地の権利というものを，長い期間同一人物が預かることは，まれである．別の言い方をするのならば，一つの興行地の権利は安定してはおらず，常に他人の手に渡る緊張のもとにあると考えることができる．また，ある興行地の持ち主が交代することは，社会内の関係性そのものにも関わることであり，そのために，社会の動向について洞察をえるためには，興行地が，どのような経緯を経て，現在の人物によって預かることとなったのかを押さえておく必要があると言えよう．

こうした見方に基づき，以下では，これまで筆者が知ることとなった，いくつかの興行地の推移を，その持ち主である歩方の経歴と合わせて記す

ことにする.[9]

事例1

宮城県石巻市では，毎年8月4，5日の両日「川開き祭り」が開催される．この時，地元百貨店の駐車場を興行地として，お化け屋敷をはじめとして，ボール投げやダーツ・ゲームなどの興行物が，毎年4本掛けられている．現在，この地の仮設興行は，不流興行社，不流満寿男さんが預かることとなっている．曽祖父の時代から，氏の興行社は同地を含めた，複数の興行地で歩方を務めている．氏は現在，市内で旅館を経営しており，毎年訪れる興行社（荷主）の人々の宿舎となっている．以下に記すものは，平成13年（2001）の巡業時にこの宿舎で行われた取材を元にしている．

はじめに取材時の印象を話すと，氏の話し振りからは，飾り気のない率直なものであったといえる．興行地の由来について話すことためには，自らの興行社について物語る必要があり，由緒が正統なものであることを強調しようとするあまり，架空の権威付けがなされることがある．だが，氏の話しにはそのような素振りはなく，成熟した人間が持つ落ち着きと，強い自信が感じられた．

同興行社がこの地の興行地を預かるようになったのは，氏から見て祖父にあたる金太郎氏にはじまる．氏は，もともと群馬県境町（現在の佐波郡境町）の香具師，不流三左エ門の身内であり，膏薬売りとして，上州一円を売りあるいていた．明治7年に三左エ門氏が71歳で死去し，兄貴である氏の後継ぎとして，金太郎氏が継ぐこととなるに見えたが，氏はすでに石巻に居を構えており，東北各地の興行地を預かることとなっていた[10]．氏は「不流」という名の由来を次のように話す．この名はそもそも，膏薬売りという先祖の商いに由来する，そしてその時の売り文句が，「水に濡れても流れない」という口上だった．氏の名には，タカマチを商いの場と

するものの精神が息づいているのである.

同興行社は代々，東北の広い範囲で歩方を務めてきており．現在においても，知らないものはない．筆者はかつて，夫人とともに，氏の先代の墓を尋ねたことがあった．墓石の裏には，生前関係のあった，東北各地の興行師の名が刻まれており，同興行社の知名度の高さを示すように思われたものだった.

同興行社は，世代の深度から伺えるように，長きに渡って，同地の興行を預かってきた(11)．この地は，江戸時代末期に先代の父によって興された興行社よりほかには関係したことはなく，そのため，この地の，興行の由緒についてさかのぼることができることは上に示した通りである.

だが，これまで他の土地について調べて来ると，同地のように由緒をたどる場合は，実際には稀であることに気付かされる.

事例 2

東京都台東区浅草は，古くから娯楽の中心地として栄えた一大歓楽街である．その中心，遊園地「はなやしき」の向かいに，稲村劇場という名の小屋があった．小規模ながら，この劇場が扱うのは，見世物小屋を専らとしており，全国各地の荷主たちが交代で，舞台に上っていた.

筆者は兼ねてより，この劇場と，劇場の主について関心を抱いていた．なぜなら，見世物小屋といえば稲村劇場の名を挙げるほど有名であり，その劇場主稲村正雄氏（故人）は，戦後の興行社会を代表する一人として，亡き後も人々の話題にのぼるほど，著名な人物だからである.

この地の仮設興行の動向，そして稲村氏の経歴について知りたいと告げると，氏の夫人は快く応じてくれた.

氏は奈良県の出身，終戦後，ある日浅草を訪れたことが縁で，露店商の一家に身を寄せることになった．このエピソードを夫人は楽しそうに思い出す．ある日，賑やかさを求め同地を歩いていた氏は，知恵の輪売りのテ

キヤの前で足を止めた．知恵の輪を上手く解くと，景品がもらえるというのである．好奇心から氏は，是非挑戦したいと手をあげた．ところがふとしたはずみから知恵の輪を壊してしまい，テキヤと口論となってしまう．

正しい年代をこれまで確めることができていないものの，露店商業界に再編成の動きが見られたこの時期，関東地方には，複数の家名を糾合する，連合体が設立されている．すぐ前に述べた一件を切っ掛けとして，氏はこの連合組織の一家に身を寄せることとなった．氏はのちに同一家の3世代目の親分となり，歩方として先述した劇場を設立することをはじめ，都内各地の興行地の世話をするようになった．

特筆すべきは，氏が，後楽園（現在の東京ドーム）において，植木市を開催したことである．この時市は一般の業者にも開放され，露店商と素人のあいだの売上に区別が生じないように配慮が凝らされたという．氏の計らいが功を奏し，同地の植木市はそののちも，訪れる人々の目を楽しませている．

さて，戦後，露店商の社会は変化の波にさらされていた（添田 1964）．ことに，浅草のような大きな歓楽街においてそれは顕著であり，多くの家名が競合する関係にあったことは想像に難くない．氏が身を寄せることになった連合体も，このように激動する時代を背景として設立されたことは，とくに強調されるべきである．また，先の事例と比較することにより，興行地の委譲の経緯について理解するさいの，一つの手掛かりを得ることができる．夫人が話すように，劇場主となる以前より，氏は露商一家の親分となっていたが，いわば，業種上の境界を横断するようにして，この地の興行地を預かることになったのである．

4. 考　　察

以上，仮設興行の社会の動向についての洞察を得るため，興行地を預かる人々の経歴に焦点を当てながら述べてきた．このような作業から，現在

までの興行社会の成立過程について理解するための，いくつかのポイントを指摘することができる．

まず言えることは，事例1に示したような，ある興行地が長い期間にわたって同一人物の手に委ねられていることは，稀であるという点である．興行地は現在まで，経歴を異にする，さまざまな人々のあいだで維持されてきたのである．また，ある興行地は常に，競合する興行社のあいだで生じる緊張状態のもとにあり，仮設興行に従事する人々にとって，それは主要な関心となっている．また，事例2で示されるように，興行地をめぐる動きは，戦後における露店業界全体の流れのもとに見て行くことにより，より明確になる．たとえば，事例2の取材時，夫人はこの地の露店業界の動向について，戦後の浅草の露店業界では，組合や連合など，新たに組織されていたと述べるが，こうした証言は，貴重なものであろう．ここからは，大戦後において，興行地をめぐる，動向は最も活発となったことが伺えるからである．たとえば，次にしめす事例において，話者は興行地の推移を，より明確な言葉によって語る．

氏の父は戦前より有名なサーカスに努めていた．その後独立，巡業をしばらくつとめるが，彼が小学校，2,3年頃，興行の荷物一式を，自らの若い衆に譲り渡した．若い衆は満州でも商売を行っていた．だが，あるとき，巡業先で「沈んだ」．つまり女にはまって借金し，荷物を借金のカタに入れられてしまったのである．

一方氏は当時，父母と三人で，北千住の長屋に30円の暖簾代と，母の内職で生活をしていた．父は，若い衆の代わりに満州に行き，荷物を取り戻したのち，別の目端のきく若い衆の荷物を分け，他の若い衆ともども，商売をするように申し渡す．だが，なかなか他の若い衆はついていかずにすぐにつぶれてしまった．

その後，太平洋戦争に入り，氏自身は戦火の少ない，先述のサーカスが経営する映画館の楽屋，6畳二間に寄宿していた．長じて後，昭和38年

(1963) に父が亡くなったあと，氏は興行師となることを決意した．当時，Hさんたちの若い衆には「七福神」の見世物をやっていた．「頭がとがっている，目玉がでている人，手がくっついている人」が舞台にでていた．

平成12年(2000)現在，氏夫妻は見世物稼業から退き，遊技場のニモツとともに全国各地を巡業している．また氏は，新潟県内で歩方を努めていたのは，父が所属していたサーカスの，「稼業上の」父であったと振り返る．

さて，この取材時筆者は，この興行権が，どのような過程を経てこの人物の手に渡ったのかという点に興味を覚えたものだった．なぜならば，彼の父が所属していたサーカスは，広く知られており，荷主から歩方に転じることを可能にするほどの力を持っていたという点が関心を引いたからである．取材当初，彼はこうした経緯について，なかなか話しにくいと述べていたのだが，後になって筆者に次のように話す．「言いにくいことだけどね，（興行地は）乗っ取ったんですよ」．

無論「乗っ取る」という彼の言葉一つを根拠として，興行地の委譲の全てを語ることは早計に過ぎるだろう．たとえば，愛媛県松山市内の興行地は，平成10年(1998)の興行を最後に幕を閉じたが，この場合には世話役の高齢化によるものであるし，また茨城県水戸市の興行地は，歩方が亡くなることによって，また別の人物の手に委ねられることとなっている．このように，現在では，興行地を引き継ぐ者がいないことや，歩方の高齢化などによって，委譲が行われる事例に数多く出会うこととなっている．だが，少なくとも，仮設興行の文化全盛期においては，「乗っ取り」のような形で，時には対立するような状況を呼ぶほどに，興行地をめぐる動きは激しいものであったことを指摘することは可能であろう．仮設興行の社会は，さまざまな勢力の間の拮抗関係として描くことことは妥当だと思われる．

5. む す び

以上の視点は仮設興行の文化全体を記述するための，あらたな視点を提供し得ると同時に，見世物に関してこれまで従来の議論に対する問題提起となる．それは，担い手の視点の欠如に由来するもので，見世物小屋の芸を説明する際の観察者の枠組みに大きく関わるものである．

従来の見世物研究では，種々の見世物芸は，個別に取り上げられる．そこでは，見世物小屋の様々な芸は，それ自体目的を持ったものとして扱われ，一つの静止画像として記述の対象となる．(朝倉 1977)．たしかに，現在目にすることのできる見世物芸の一つ一つを楽しむ限り，このようなアプローチには疑問をさしはさむ余地がないように一見すると見える．この時，芸を記述する観察者は，各人がそれぞれ抱く，「見世物的なもの」という枠組みとともに，見世物の芸を眺めるが，彼の枠組みそのものが問題視されるような状況は生じないのである．

だが，各人の枠組みは，たとえば，見世物芸を，仮設興行の社会とともに，仮設興行の文化として連続性を持つものとして捉えようとすると，途端にその弱点をあらわにする．たとえば，現在，仮設興行に所属する興行物の一端を挙げてみよう．平成 13 年 (2001)4 月，青森県弘前市で開催された，「弘前桜祭り」においては，「お化け屋敷」「オートバイ・サーカス」「マジック・ハウス」「バズーカ砲」「ゴー・カート」「猿の劇場」が行われた．

以上の興行物全てに共通するような，「見世物的なもの」を，抽出することができるだろうか．これまで知る限り，こうした試みがなされた研究に出会ったことはない．「見世物的なもの」という枠組みは，各人の恣意に基づいて意味付けに依拠する，漠然とした印象の域に未だに留まっているのである．

このような難点に気付くことによって，筆者は，見世物文化を一端当事

者のもとに返し，その文化のよりどころとなる仮設興行の社会の動向とともに捉え直そうという方向に取材内容をシフトさせることとなった．芸をそれ自体目的を持ったものではなく，「芸を行うこと」の背後にあるまた別の理由を探る方向へ，視点を変える必要を感じたのである．

結果としていえるのは，仮設興行の文化は，仮設興行に従事する人々の，当該社会を生きぬこうという強い意志によって支えられているという点である．たとえば，これまで述べてきた，興行地を巡る拮抗関係は，今述べた，人々の強い意志の主要な現われの一つとして位置付けることができるものである．そして，仮設興行の文化とは，担い手たる仮設興行の社会の消長のもと，相対化される必要があるといえるのである．

注

（1） 仮設興行の社会」とは香具師の社会において展開してきたこうした，仮設興行物を生業とする人々による連合組織を指し，昭和31年(1956)に設立された，全日本仮設興行協同組合を指す．

（2） 鵜飼他（鵜飼他前掲書）には平成11年(1999)現在までの見世物関連文献がレヴューされている．

（3） 「仮設興行文化」とは全日本仮設興行組合加盟の興行物を指している．

（4） 以下の記述は，平成9年(1997)から平成13年(2001)現在までの取材に依拠しており，東京都在住，大寅興行社の巡業記録と，巡業先で出会った人々からの聞き書きが中心となっている．

（5） 岩井はテキヤの業種区分として，「大ジメ」，「コロビ」，「サンズン」，「コミセ」，「タカモノ」を挙げている（岩井1963）．だが，こうした区分は現在明確ではない．タカモノの当事者は自身以外のテキヤをまとめて「コロビ」と呼んでいる．

（6） 祭礼や縁日をはじめとする歓楽地である．

（7） この点については労働局婦人少年局を参照（労働省婦人少年局1950）

（8） 回答者数の少なさに因る．

（9） なお，両者の関係については次を参照されたい．まず青江はその著書のなかで，芸能界全般における社会の内実を詳しく報告している（青江1958）．売上勘定などについては丸山が，サーカス興行の事例とともに述べている（丸

山 1981).

(10) 同氏に関する記述は不流氏が所持する，郷土史家との私信に基づいている（詳細は不明）．また，境町における不流氏の動向については次を参照（篠木 1960).

(11) 尾崎の著書には，氏の先代，平太郎氏とのインタビューが記されている（尾崎 1958).

参考文献

阿久根　巌 1977『サーカスの歴史—見世物小屋から近代サーカスへ—』 西田書店

青江　徹　1958『興行師』 知性社

朝倉無声　1977 (1928)『見世物研究』 思文閣出版

猪野健治　2000「松田義一　新橋闇市を支配，アウトロー化した三国人との死闘に勝ち利権を一挙に手中にしたが」『伝説のヤクザたち—日本アウトロー烈伝—』 洋泉社

岩井弘融　1963『病理集団の構造—親分乾分集団研究—』 誠信書房

丸山奈巳　1981「掛け小屋から丸テントへ」南博他編『さすらう：サーカスの世界』（芸叢書 2）白水社

尾崎宏次　1958『日本のサーカス』 三芽書房

南博他編　1981『さすらう：サーカスの世界』（芸叢書 2）白水社

労働省婦人少年局編 1950『サーカスに働く年少者—サーカスに働く年少者実態調査の報告—』

篠木弘明 1960「境町の不流一家」『歴史資料　45』 境町公民館，境町地方史研究会

添田知道　1964『香具師の生活』 雄山閣出版

鵜飼正樹・北村皆雄・上島敏昭 編　1999『見世物小屋の文化誌』 新宿書房